高句麗の前期平壌城と清岩里土城

千田剛道

1. はじめに

平壌は、高句麗後期（四二七～六六八）の都城の地である。この間、平壌のなかで、一度遷都がある。史料上では、どちらも平壌城であり、後半は長安城の名もある。混乱をさけるため、研究上では、後期都城の前半を前期平壌城、後半を後期平壌城とよんで区別しており(註1)、ここでもこれにしたがう。

本稿であつかう清岩里土城は、平壌市街地の東北郊外、大同江の北岸にある（図1）。清岩里土城は、山城である大城山城とともに、前期平壌城を構成する重要な平地城であり、王宮が存在したと考えるが、なお未解明の点が少なくない。

平壌における高句麗都城、とくに前期平壌城に関する研究の現況を見ると、文献を主とした研究(註2)に比して、遺跡・遺物を主とした考古学的な研究は立ち遅れているのが現状であろう。

本稿では、このような認識にたって、近年の発掘調査の成果をふまえ、主として考古学的資料に即して前期平壌城

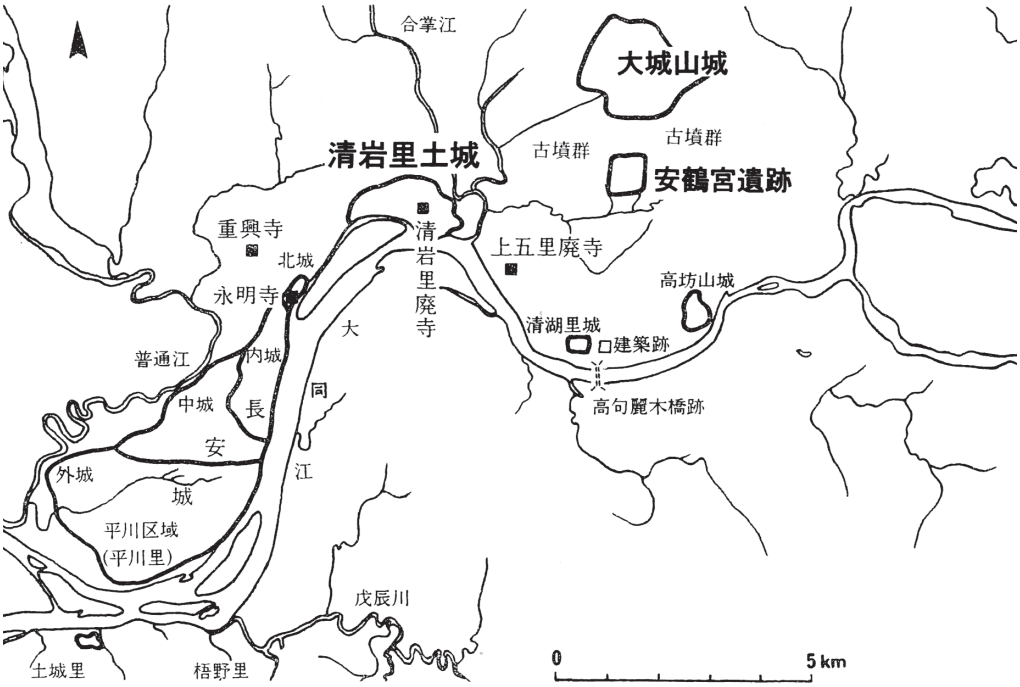


図1　平壌の高句麗都城関係遺跡

としての清岩里土城を考えてみたい。

なお、清岩里土城は、地名の改定により現在は、清岩洞土城とよばれているが、本稿では、便宜上、清岩里土城の名を使用する(註3)。

2. 平壌における高句麗都城の調査研究略史

清岩里土城の具体的な検討に入る前に、平壌における高句麗都城に関する調査研究史の概略をみておきたい。

まず、総督府時代の調査研究をみよう。

関野貞（一八六八～一九三五）は、高句麗の前期平壌城（四二七～五八六）を構成する山城として大城山城とセットになる王宮の所在する平地城として当初、安鶴宮遺跡をあげた(註4)。しかし、後に、安鶴宮遺跡の瓦の年代は高句麗末に降るとして、新たに清岩里土城を王宮遺跡として推定し直す。清岩里土城内には、礎石が残り、瓦も散布していた。特に土城内東よりと西よりには瓦が多量に散布している箇所があり、関野は王宮の跡と推定したものの発掘には至らなかった(註5)。なお、関野以来現在まで、大城山城に関しては王都の背後の逃げ城としての位置づけに異論はでていない。

清岩里土城にたいする最初の発掘調査は、関野の没後、一九三八年に土城内の東よりで実施され、寺院跡（清岩里廃寺）を検出した結果、関野の説を否定する形となる(註6)。

その後、清岩里土城と王宮との関係をめぐる議論は進展しないまま解放を迎える。

次に解放後の調査研究の状況をみる。

解放後、この地域の調査は朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略す）の手にうつる。大城山城とセットをなす平地の王宮について、北朝鮮の学界では、かつて関野が否定した安鶴宮遺跡とする見解を打ち出した(註7)。これにともない、清岩里土城は、王都を防衛する城のひとつとする位置づけにかわる。安鶴宮遺跡は、その後、大城山城とともに発掘調査されたが、この見解に変更はない(註8)。

安鶴宮遺跡を前期平壌城王宮とみる説は北朝鮮では定説となっているが、韓国、中国、日本の研究をみると、国により、研究者により見解の相違も著しい(註9)。

3. 清岩里土城に関する調査研究の成果

解放後、清岩里土城に関しては、土木工事にともなう遺物の発見(註10)以外には、ほとんど情報がなかったが、近年、土城にかかわる発掘調査を実施し、城壁の構造を明らかにしたほか、土城内の建築址の発掘などの成果を報告している(註11)。ここでは、まず、こうした近年の調査成果を含め、

城壁、や城内の建築址、出土遺物など、清岩里土城に関する情報を整理したい。

まず、朝鮮総督府時代の調査研究をとりあげ、ついで解放後の北朝鮮による調査研究の成果を図をもとにして具体的にたどってみる。

（一）朝鮮総督府時代の調査研究

平面図

清岩里土城の平面実測図は、一九二九年刊行の『高句麗時代之遺蹟　上冊』[註12]が最初であって、5千分の1の地形図に土城の城壁、門址、礎石所在地を表現している（以下、この図を「一九二九年の図」と略記する）。ここに掲げた地図（図2）は、清岩里土城にたいする初めての発掘となった一九三八年の調査の報告書の図（一九四〇年刊行、[註13]以下、「一九四〇年の図」と略記する）で、基本的に一九二九年の図をベースに作成したものである。ここでは、総督府時代の調査成果をこの一九四〇年の図によってみておきたい。

城壁・門址・礎石

これによると土城全体形は、大同江に面して半月形をなす。東西約2キロメートル、南北約600メートルの規模で、城壁は、西辺から北辺にかけてと、東辺南部に認めら

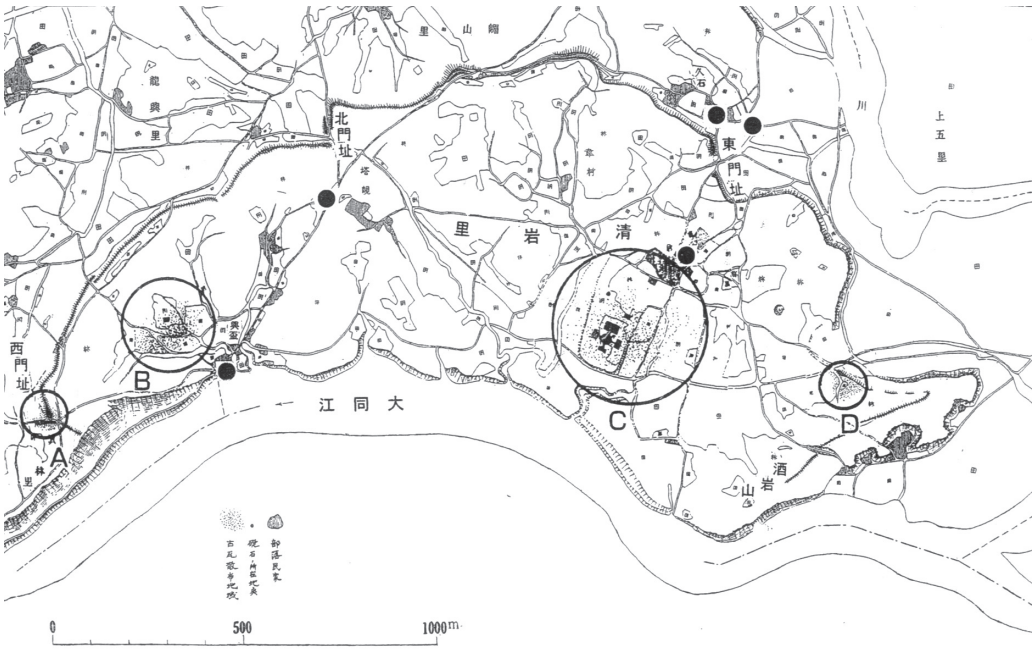


図2　総督府時代の清岩里土城の調査成果

れ、南辺にはまったく確認していない。城門址は「西門址」「北門址」「東門址」の3か所を表示する。そのほかでは、土城内に3か所、および「東門址」を出たすぐのところ2か所、合計5か所に礎石の所在を黒丸で示す。礎石の個数が一個であるのか、複数なのかは一九二九年の図でも、一九四〇年の図でも記載がない。ここまでは、一九二九年の図と内容は同一である。

瓦散布地域・寺院址発掘

一九四〇年の図では、発掘した「清岩里廃寺」の遺構図を図示するとともに、新たに「古瓦散布地域」として4か所をドットで示す（図2、A～Dを付した4箇所の円の範囲）。一九二九年の図の備考欄には、「城址内ニハ高勾麗時代及高麗時代ノ瓦片散在ス」とあり、これを視覚化したことになる。清岩里廃寺の場所は、このうちCにあたり、かつて関野が王宮に推定した場所である。

採集瓦集成

総督府時代には、このような調査のほかに、採集瓦の集成がある。一九二九年発行の『高句麗時代之遺蹟　上冊』には、清岩里土城にかかわるとみられる多数の採集瓦を収録する。

採集地の情報として、「清岩里」など地名を付している瓦は、清岩里土城にかかわる瓦であろう(註14)。

（二）解放後の調査研究

解放後の北朝鮮による調査は、上記の総督府時代の成果に新たな情報を付け加えている。

その主なものをあげると、まず、一九五八年、土城付近から、土木工事中に金銅製の透かし彫り金具などの発見がある(註15)。詳細な出土状況が不明確で、土城との関わりは不詳である。次に、一九九八年以降に公表された土城自体にかかわる発掘の報告(註16)によって、城壁構造、土城内の建物址、などを記述する。

土城の規模

土城の規模については、詳細な数値の記述があり、周長約３４５０メートル、北城壁（北門～東門）が約７００メートル、東城壁（東門～酒岩山）が約６００メートル、西城壁（北門～西門）が約６５０メートル、南城壁が約１５００メートルとする。「南城壁」は、「南辺」の意味であろう。

城壁の規模・構造・変遷

城壁自体の規模は、元来の様相を比較よく残す北門付近での状況の記述がある。そこでは城壁の内側での高さ約2.5メートル、外面の高さ約5メートル、上部の幅1メートル程度、基底部の幅が約17メートルである。

城壁の調査では、城壁の構造、変遷にかかわる重要な知見

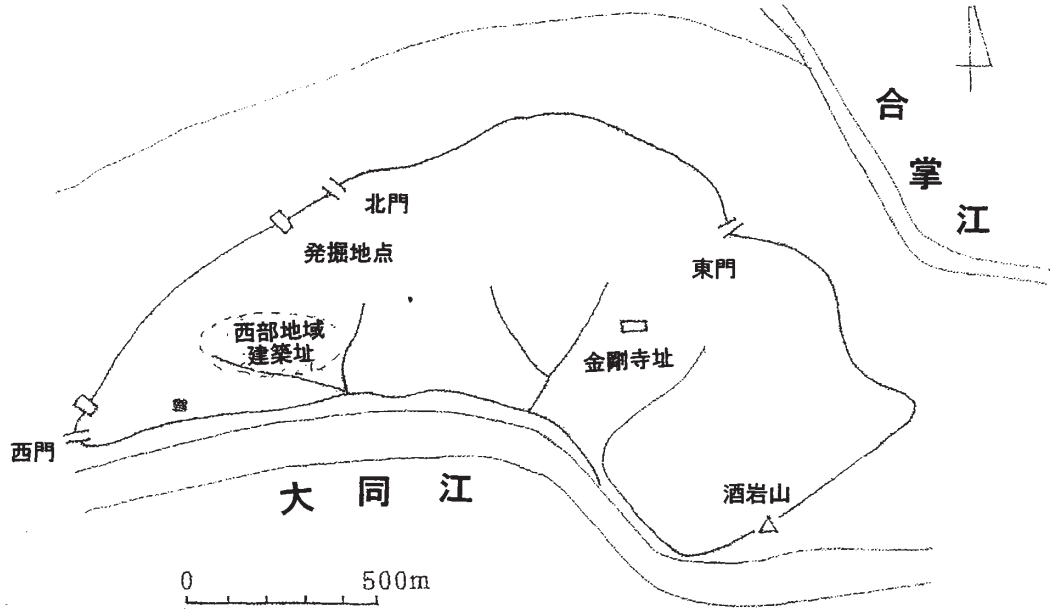


図３　解放後の清岩里土城の調査位置図

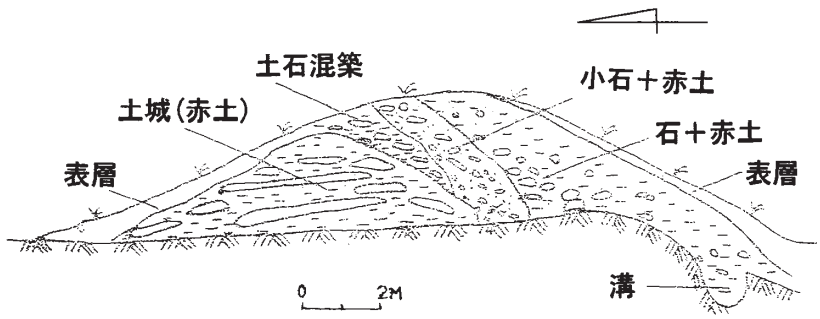


図４　清岩里土城の城壁断面図

を報告する。城壁断面の調査は、北門址の西側（図3「発掘地点」）で実施している。報告では、城壁は、下層城壁と上層城壁に分かれ、上層は高句麗時代であるが、下層は、古朝鮮時代にさかのぼるとする。図（図4、ただし、この城壁断面図で、北側の「表層」「土石混築」の表現には理解しがたい部分がある。）との対比でいえば、「下層城壁」は、「土城（赤土）」が該当しよう。そして、「上層城壁」は、高句麗時代には3度にわたって増築したとし、各時期、それぞれ城壁築造材料が異なるとする。この「増築」は、古い順から「土石混築」、「小石＋赤土」、「石＋赤土」、の各層に該当しよう。

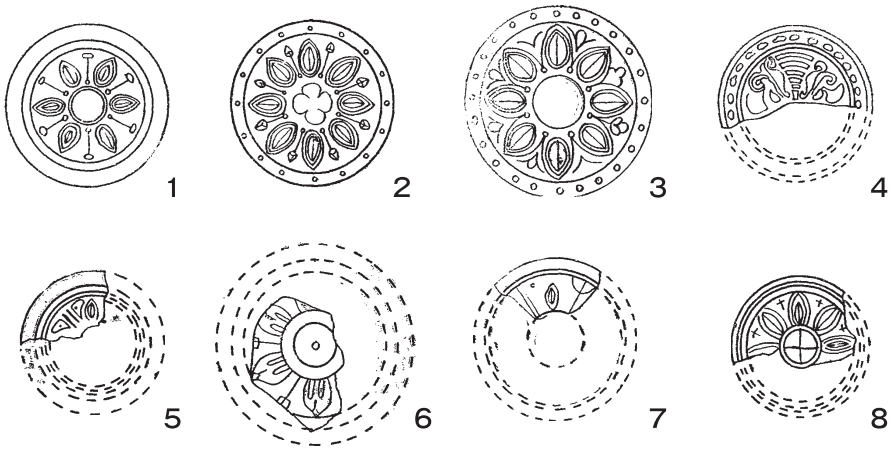
土城内の建築址

土城内西よりで建築址を発掘している。「西部地域建築址」がそれである。この「西部地域建築址」は、礎石は失われているが、礎石下の基礎施設や、縁石により、長さ50メートル、幅20メートルの規模の東向きの建物に復元できるとする。報告では、高句麗時代の建築址と述べる。

出土瓦とその年代

一九九八年以降の報告では、土城の城壁と、この「西部地域建築址」にかかわる出土瓦をあげている。城壁や、この建築の年代にかかわる重要な資料となるので、見ておこう。

軒丸瓦は全部で8種類掲げる（図5）。出土状態には、西部地



1～4：西部地域建築址（発掘）　5：西部地域建築祉周辺・城壁（発見）
6：土城内（発見）7・8：土城内（収集）

図5　解放後の清岩里土城出土瓦

域建築址に関するものと、土城壁にかかわるものとがあり、また、記述では、「発掘」「発見」「収集」を区別している。

1～4は、「西部地域建築址」から「発掘」したもの、5は、「西部地域建築址周辺」および「土城壁」から「発見」したものである。6は、「土城内」から「発見」したもので、7・8は、「土城内」から「収集」したものである。瓦の年代について報告では、1～3、5～7が高句麗時代、4が高麗時代、8は高句麗末～渤海とする。

4. 清岩里土城内の建築と城壁の年代

「西部地域建築址」の年代

「西部地域建築址」の瓦について検討しよう。「西部地域建築址」から「発掘」した瓦について報告では、1～3が高句麗時代（1：五世紀末～六世紀、2：五世紀末以降、3：六世紀中葉～六世紀末頃）、4が高麗時代とする。4については、異論がないが、1～3については、安鶴宮遺跡の発掘で類例が知られていて、高麗時代に降る瓦とみるべきである(註17)。

結局、「西部地域建築址」から「発掘」した瓦は、すべて高麗時代に属するから、「西部地域建築址」の年代も高麗時代であることになる。5は、「西部地域建築址周辺」からの「発見」とあって、瓦の年代は、「四世紀末」とするが、筆者の平壌地域高句麗瓦編年（図6、註18、以下「瓦編年」と略する。）では、第2期にあたり、五世紀半ばから六世紀前半ごろの瓦とみる。この瓦はその出土状況が「西部建築址周辺」「発見」であって、「西部地域建築址」「発掘」の瓦とは明確に区別されていることからこの瓦の年代と「西部地域建築址」の年代は直接結びつかないであろう。

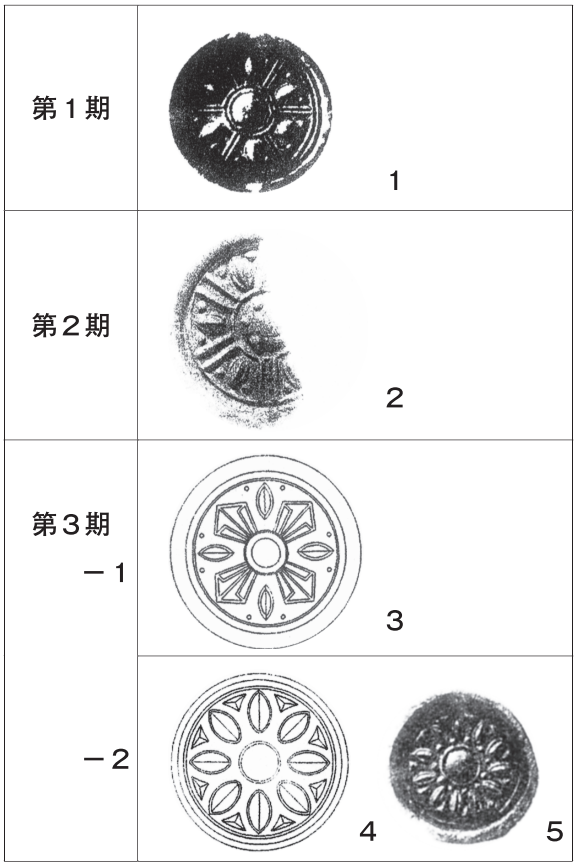


図６　平壌地域高句麗瓦編年図

この高麗時代の遺構を考える際に、ただちに想起するのは、城内からかつて発掘された高句麗時代の寺院址（清岩里廃寺）には、重複して高麗時代の遺構が検出されていることとの関連である(註19)。大きく見れば、この「西部地域建築址」も、この高麗時代の寺院との関係で理解されるべき遺構であろう。

城壁の築造年代

清岩里土城という際に、城壁のみをさす狭義の場合と、城壁と城壁でかこまれた範囲をさす広義の用法がありうる。ここでは、城壁自体の築造年代を考える。

上にみたように、解放後の発掘により、城壁構造が明らかになり、土城の変遷については、初築が古朝鮮時代にさかのぼるとしている。その根拠は、出土遺物による。北門付近と、城内の発掘、試掘過程で、青銅器時代から古朝鮮時代の遺物がでていること、城壁のうち、下層城壁からは高句麗時代の遺物がでないが、上層城壁からは、赤色の高句麗瓦が出土することなどをあげている。

しかし、城壁から高句麗時代の遺物が出土しないことは、その城壁の築造が高句麗時代以前とする根拠にはならない、と考える。現時点では築造年代が高句麗時代よりさかのぼるとする確実な考古学的資料は無いとするべきであろう。

城壁の年代に関わる資料としては瓦がある（図5－5）。これは城壁から発見された瓦であり、いまのところ城壁に直接関わる瓦としては唯一の資料である。出土状況は、報告によると、城壁断面との対応で言えば、「上層城壁」すなわち、「土城（赤土）」より上層の3層のうちのいずれかの層からであろう。この瓦は、報告では、四世紀末とするが、筆者の瓦編年では第2期、五世紀後半から六世紀前半ごろの瓦である。この瓦からは、城壁の初築年代が第2期以前であることが推測できるにとどまる。なお、土城内から発見、あるいは収集された瓦（図5－6～8）は瓦編年の第3期、すなわち六世紀後半以降の瓦である。

5. 前期平壌城王宮の所在と清岩里土城の年代—

以上のような考古学的資料をふまえて、王宮の所在地、および清岩里土城の変遷、の二点について述べておきたい。

王宮の所在地

王宮の位置の推定に関しては、筆者は、かつて、土城内のほぼ中央部を占めるBとCの間の空間を、王宮の候補地として推定した(註20)。BとCの間には、瓦散布地が存在しない。この空間に王宮を想定するとすれば、その建築は瓦葺き以外の構造とみることになることも指摘した。上述のよう

に、Bの瓦が明らかになり、高麗時代の建築にともなうことが判明した現在、この筆者の王宮の位置の推定はその可能性を増したと言えよう。ここで先には記述を省略した瓦散布地AおよびDについて触れ、この問題をさらに深めたい。

まず、もっとも西のAは、その分布状態からみて西門址の瓦であることほぼ間違いないであろう。またもっとも東のDは、東から西に鋭角をなして屈曲する城壁の内側に接して分布する。このような狭い場所に王宮を想定するのはほとんど無理であろう。したがって、城内の瓦散布地域4か所は、以上の検討により、いずれも王宮の候補地から外れることになる。このことは王宮の姿を考える際に重要である。

王宮をこの場所に推定するならば、そこには瓦の分布が知られていない場所であるので、王宮建築は瓦葺きではなかったことになろう。このことは、高句麗王宮の景観を考える際に重要な問題を提起しよう。

清岩里土城の年代

清岩里土城築造の年代を考える際、とりわけ重要な門の瓦が不明であることは、大きな制約である。ただし、大城山城との関係で清岩里土城の年代の一端を推測できることは見逃せない。というのは、かつて関野貞は、大城山城の表門(註21)では南門）と清岩里土城の表門（図2の東門址）との有機的な関係を指摘した(註22)。逃げ城としての大城山城と平地の王宮としての清岩里土城をセットとして、中期の都城である集安の山城子山城と通溝城との関係とも合致するとみたのは鉄案である。この大城山城の出土瓦は、四二七年の平壌遷都を上限とすることができる。

清岩里土城にかかわる遺構にともなう高句麗時代の瓦としてはこれまで清岩里廃寺の瓦が唯一の資料であった。これに近年の資料が加わったことはこれまで記述してきたとおりである。ところで、大城山城の瓦は、瓦編年の第1期、すなわち五世紀前半にあたり、清岩里廃寺の瓦は第2期からはじまる。特に城壁発見の瓦は、「上層城壁」からの発見と推測でき、城壁の修築時に混入した瓦と理解できる。この瓦は，第2期に属する。

したがって、確実に清岩里土城との関連で出土している瓦は、第2期に始まることがわかる。以上のように、清岩里土城の城壁修築および廃寺の年代の一点が瓦編年第2期にあることが判明したことは重要である。過去の清岩里の採集瓦のなかには、第1期にあがるものもあるから、清岩里土城の初築が大城山城の築造年代にまで上がることは十分ありうるといえよう。

6. おわりに

以上のように、解放後の調査成果は、清岩里土城の性格の解明に貴重な資料を付け加えた。

前期平壌城の王宮の所在地を清岩里土城内に推定する考えの当否は、将来の発掘調査によって検証されようが、現時点で、知りうる資料で考察を重ねておくことも意義があろう。

また、建築が瓦葺きであるか否かは、王宮の景観を復元するうえでも大きな問題となろう。さらに、同じ土城内に王宮と寺院が併存することになる前期平壌城の様相のもつ意義など都城の様相に関して論ずべき多く課題が残されている。これらは今後に期したい。

（追記）

本稿は、二〇一一年四月一七日、NPO法人国際文化財研究センター主催の第12回なみはや歴史講座（於：大阪韓国文化院）での発表「清岩里土城を考える」および同年一〇月二日、第62回朝鮮学会大会（於：天理大学）での発表「平壌・清岩里土城の発掘調査をめぐって」をもとにまとめたものである。この二つの会において有益な御教示をいただいた永島暉臣慎、松井忠春、藤田憲司、東潮、田中俊明、濱田耕策の各氏に感謝する。

【註】

1 田中俊明「後期の王都」『高句麗の歴史と遺跡』（森浩一監修、東潮・田中俊明編著）、中央公論社、一九九五年、195頁。

2 田中俊明「高句麗の平壌遷都」『朝鮮学報』第190輯、朝鮮学会、二〇〇四年、21～60頁。この論文は、文献史料の検討のみならず、現地の遺跡をふくめて考察しており、前期平壌城に関する研究の到達点を示す。

3 朝鮮総督府時代は平安南道大同郡林原面清岩里、現在は平壌特別市大城区域清岩洞である。

4 朝鮮総督府『朝鮮古蹟圖譜解説　二』朝鮮総督府、一九一五年、2頁

5 関野貞「高句麗の平壌城及び長安城に就いて」『史学雑誌』39－1、一九二八年、1～30頁

この論文が関野貞の平壌における高句麗都城に関する最新かつ最後のまとまった記述である。

6 小泉顕夫「平壌清岩里廃寺址の調査（概報）」『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会、一九四〇年、5～19頁、圖版第一～一五。この報告書では、この遺跡を三国史記高句麗本紀文咨王七年（498）条の記事「秋七月創金剛寺」にみえる金剛寺に比定する（同書19頁）。

7 蔡熙國「平壌附近にある高句麗時期の遺蹟―高句麗平壌遷都

一五三〇周年に際して―」『文化遺産』一九五七－五、一九五七年、5～19頁

8 蔡熙國『大城山一帯の高句麗遺蹟に関する研究』（遺蹟発掘報告第9輯）、社会科學出版社、一九六四年、および金日成総合大學考古學・民俗學講座『大城山の高句麗遺蹟』金日成総合大學出版社、一九七三年

9 韓国と中国の代表的な著述をあげる。韓国では、韓國考古學会『韓國考古學講義』韓國考古學会、二〇〇六年初版、二〇一〇年改訂版。中国では、魏存成『高句麗考古』吉林大学出版社、一九九五年、同『高句麗遺跡』文物出版社、二〇〇二年、李殿福「高句麗的考古学」、東北考古研究（二）』、中州古籍出版社、21～30頁。日本の著述に関しては千田剛道、二〇一一年、「高句麗都城研究と平壌安鶴宮遺跡」、『近畿大学文芸学部論集「文学・芸術・文化」』第22巻第2号、78・79頁参照。

10 ファン・ウク「平壌《清岩里土城》附近で發見された高句麗金銅遺物」、『文化遺産』一九五八－五、一九五八年、63～66頁、

11 a　ナム・イルリョン、キム・ギョンチャン「清岩洞土城について（1）」『朝鮮考古研究』一九九八－二、一九九八年、13～15頁

b　ナム・イルリョン、キム・ギョンチャン「清岩洞土城について（2）」『朝鮮考古研究』二〇〇〇－一、二〇〇〇年、12～15頁

c　リ・グワンヒ「清岩洞土城から新たに發見された軒丸瓦の年代」、『朝鮮考古研究』二〇〇四－一、二〇〇四年、16～19頁、

d　チェ・スンテク「清岩洞土城」、社会科學院考考古學研究所『朝鮮考古学學全書27　高句麗の城郭』（中世編4）、㈱ジンインジン、二〇〇九年、69～73頁

12 朝鮮総督府『高句麗時代之遺蹟　圖版上册』（古蹟調査特別報告第七册）、朝鮮総督府、一九二九年

13 前掲註6

14 前掲註12

15 前掲註10

16 前掲註11

17 1、2、3は、安鶴宮遺跡出土瓦の報告（註8前掲『大城山の高句麗遺蹟』）では、それぞれ⑩（同書230頁）、⑧（同書229頁）、④（同書228頁）と同一の形式または近似する類例とみなすことができる。安鶴宮遺跡の瓦が高麗時代のものであることは、千田剛道「高句麗都城研究と平壌安鶴宮遺跡」（註9前掲）参照。

18 千田剛道「高句麗瓦研究の二、三の問題―清岩里土城の瓦と平壌地域の瓦編年―」『第32回　東アジア古代史・考古学研究会

交流会　地域発表及び初期須恵器窯の諸様相－予稿集－』（註18）、大阪朝鮮考古学研究会、二〇一〇年、13～19頁

19　前掲註6に同じ

20　千田剛道「高句麗・百済都城における瓦の使用」『文化財論叢Ⅲ』（奈良国立文化財研究所創立50周年記念論文集）、奈良文化財研究所、二〇〇二年、409～414頁

21　西南の谷に開く門をさす。報告書『大城山の高句麗遺蹟』（前掲註8）では「南門」（同書30～35頁）。

22　前掲註5

図版出典

図1　朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会『朝鮮遺跡遺物図鑑』第3巻、一九九〇年、図版22および同第4巻、一九九〇年、図版316を参考に作成した。

図2　『昭和十三年度古蹟調査報告』（註6）、圖版第二に瓦散布地を示すA～Dを付した円4箇所を加筆し、礎石の所在地を示す黒丸を拡大した。

図3　『高句麗の城郭』（註11d）、70頁

図4　『朝鮮考古研究』二〇〇〇－一（註11b）13頁

図5　『朝鮮考古研究』二〇〇四－一（註11c）18頁から配列、番号を変更して作成した。

図6　『第32回　東アジア古代史・考古学研究会交流会　地域発表及び初期須恵器窯の諸様相－予稿集－』（註18）18頁